

2001年度春季大会の告示

1. 期 日：2001年5月8日(火)～10日(木)

2. 会 場：東京大学本郷キャンパス
(東京都文京区本郷7-3-1)

3. 研究発表

一般の発表は原則としてポスターとするが、申込状況に応じて一部口頭発表を実施する(下記「一般発表セッションの方法」参照)。その他に、6件の専門分科会を実施する。専門分科会では十分な時間をかけた口頭発表を行う。専門分科会のテーマは公募され、講演企画委員会の審議によって決定された(下記「講演申込要領」参照)。

講演申込方法については「講演申込要領」(下記)参照。

4. シンポジウム

大会第2日(5月9日)に開催予定。テーマは「21世紀の気象学—将来展望」。

5. 大会参加費、懇親会費

郵便振込による前納または当日受付による。大会当日は受付が混雑しますので、極力前納するようお願いいたします。

金額は以下の通り。

大会参加費：

	一般会員	学生会員	会員外
前納	2,000円	1,000円	-----
当日払	3,000円	2,000円	3,000円

懇親会費：

	一般会員	学生会員	会員外
前納	4,500円	3,500円	-----
当日払	5,500円	4,500円	5,500円

なお懇親会は大会第2日(5月9日)夕刻に開催予定。

講演申込要領

1. 発表の種類

- (1) 上記の通り、一般発表(ポスター及び口頭)と専門分科会における口頭発表の2種類となる。
- (2) 専門分科会へ申し込まれた講演は、コンピーナーの判断によって、専門分科会への採否が決定される。専門分科会に採用されなかった講演は、原則として一般発表へ変更となる。ただし、申込みの時点で申し出れば(申込用紙に選択欄あり)、不採用時に講演をキャンセルすることもできる。
- (3) 一般発表は原則としてポスターとするが、会場の制約からポスターの掲示可能数には上限があることから、講演の一部を口頭発表によって行うこととする。講演の方法(ポスター/口頭)については講演申込時に選択できるが、必ずしも希望通りになるという保証はない。

2. 発表件数の制限

一般発表については、1講演者について異なるテーマのもの2件以内とする。この制限に抵触する申込があった場合や専門分科会からの種目変更によって制限に抵触することになった場合には、講演企画委員会が適切に処置する。

3. 申込方法

(1) 一般発表への申込

- 本号末の申込用紙に記入し、予稿集原稿を添えて講演企画委員会に送付する。
- 申込期限：2001年2月13日(火) 必着
- 送付先：
〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1
気象研究所予報研究部内
講演企画委員会(永戸久喜)

(2) 専門分科会への申込

- 本号末の申込用紙に記入し、予稿集原稿を添えて講演企画委員会に、また両者のコピーを各分科会の受付に送付する(送付先は下記を参照)。
- 申込期限：2001年2月13日(火) 必着
- 原本送付先：
〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1
気象研究所予報研究部内
講演企画委員会(永戸久喜)

• コピー送付先：

- ①極域寒冷域対流圏の循環と変動(略称：極域寒冷域対流圏)
〒173-8515 東京都板橋区加賀1-9-10

国立極地研究所

平沢尚彦

②地球シミュレータ時代の数値モデル (略称: 地球シミュレータ)

〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学気候システム研究センター

住 明正

③APEX: アジア域の粒子環境の変動についての研究会 (略称: APEX)

〒314-0012 茨城県鹿嶋市平井893-1

通信総合研究所鹿島宇宙通信センター

岡本 創

④中間圏の物理化学過程 (略称: 中間圏)

〒611-0011 京都府宇治市五ヶ庄

京都大学宙空電波科学研究所

津田敏隆

⑤豪雨・豪雪をもたらすシステム-メソ対流系 (略称: メソ対流系)

〒305-0052 茨城県つくば市長峰1-1

気象研究所予報研究部

吉崎正憲

⑥アジアモンスーン域での集中観測研究 (GAME) で何が得られたか? (略称: GAME)

〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学生産技術研究所

沖 大幹

4. その他

- (1) 最近、講演申込用紙に書かれたタイトルや著者名が予稿集原稿に書かれたものと異なる申込が多く、講演予稿集編集作業に支障をきたしています。講演申込用紙記入の際には上記の点に十分にご注意下さい。
- (2) 申込まれた予稿の内容が、(ア)気象学とは全く無関係である、(イ)極めて非合理的・非論理的である、(ウ)他者を誹謗中傷する部分がある、等の理由により、講演を認めることが適当でないと講演企画委員会が判断した場合には、講演を認めないことがあります。
- (3) 大会プログラムは「天気」3月号及び日本気象学会のホームページ (<http://www.soc.nacsis.ac.jp/msj/>) に掲載されます。ホームページへの掲載は締切から約2週間後までに行われる予定ですので、講演申込者は申込が受理されているかどうかなどの確認に利用して下さい。

一般発表セッションの方法

1. 一般発表は原則として、大会期間中の各日の午前中に一般口頭発表及びポスターの概要紹介を行い、その後、午後にかけてポスター発表を行う予定である。
2. ポスター発表の概要紹介の持ち時間は30秒で、OHPを用いることができる。
3. 口頭発表は一件(講演・質疑あわせて)5分とし、ポスターの概要紹介の前に行う。発表会場はキーワードに基づいて割り振るが、細かなセッション分けは行わない。
4. ポスター発表の時間は1時間半程度とする。ポスター発表中は専門分科会は行われず、各講演者がポスターの前にいなければならない時間(拘束時間)を30分間設定する。
5. ポスターの掲示・撤去は、講演者自身が行う。掲示にあたって鋸が使用できる。必要な鋸は各自が用意すること。
6. ポスターには講演題目・講演者名を明記しておくこと。
7. 掲示板は縦120cm×横90cm程度である。なおポスターは大きな紙1枚に書く必要はなく、小さい紙に分けて書いたものを当日並べても良い。

講演における機器の使用について

1. 専門分科会ではOHP・VHSビデオ・スライド・PCプロジェクターが使用できる。
2. 会場の構造上、VHSビデオは見えにくい場合がある。
3. スライド機器の操作は発表者自身(またはその協力者)にお願いする場合がある。
4. PCプロジェクターの使用を希望する場合は以下の点を予め了承すること。

- ・パソコンは各自で持参すること。会場にはプロジェクターおよび接続ケーブルのみを準備し、パソコンは用意しない。
 - ・突然の故障や接続ができないなどのトラブルが発生した場合も考慮して、最低限の発表が出来るだけのOHPシートも用意しておくこと。
5. 一般口頭発表及びポスター発表の概要紹介についてはOHPのみが使用できる。
 6. 講演申込用紙に機器使用に関する記載が無い場合

はOHPのみを使用するものとみなす。

7. 機器使用の申込は講演申込時にのみ受け付ける。それ以降の変更や追加は一切認めない。
8. 講演申込用紙の「使用機器」欄に記載されている以外の機器を使用したい場合やその他の要望がある場合は、機器や物品の名称及びその使用方法をなるべく具体的に欄外に記入すること。ただし会場の都合などにより、要望が全て受け入れられる保証は無い。

専門分科会の概要紹介

2001年春季大会では下記の通り、6件の専門分科会が開かれます。

①テーマ：極域寒冷域対流圏の循環と変動

趣旨：極域寒冷域対流圏における循環と変動は、内部に存在する大気擾乱だけでなく、中低緯度や成層圏など周辺大気領域や、下部境界としての陸面や海洋の変動とも深く関わっている。特に他の緯度帯と異なり、雪氷（雪、海氷、凍土、氷床）の果す役割が重要である。また、極域寒冷域はもともと気温や大気循環の自然変動が大きな地域であるが、温暖化の影響が最も顕著に現れる地域のひとつとされている。その実態は、近年益々充実してきた観測や客観解析データの解析、気候モデルを用いた研究の進展等により、明らかにさつつある。

そこで、本分科会では、両半球の極域寒冷域対流圏における循環と変動に関連する研究を一堂に集めて同テーマに関する理解を深めつつ、極域寒冷域対流圏が気候系に果す役割の解明へ向けて、今後の研究の方向づけを探りたい。観測・データ解析・数値モデル・理論など手法を問わず、さまざまなタイムスケールの現象に関する研究発表を歓迎する。

コンピーナー：中村 尚(東京大学理学部)、平沢尚彦(国立極地研究所)、佐藤 薫(国立極地研究所)、高田久美子(地球フロンティア研究システム)、阿部彩子(東京大学気候システム研究センター)、本田明治(地球フロンティア研究システム)

②テーマ：地球シミュレータ時代の数値モデル

趣旨：地球シミュレータと呼ばれる、現在の計算機の1000倍程度の能力を持つ計算機を始めとして、TFLOPS マシンが21世紀初頭に実用に供されようとしている。この計算機資源を前提に、次世代モデルの開発が、各地の研究センターで行われている。しか

しながら、単なる数値モデルの大型化では、期待される成果が得られる保証はない。そこで、本分科会では、各機関でのモデル開発の方向性を報告してもらい、今後の数値モデル開発のあるべき姿、次世代モデルに相応しい物理過程など、今後のモデル開発の方向性を議論する。

コンピーナー：住 明正(東京大学気候システム研究センター)

③テーマ：APEX：アジア域の粒子環境の変動についての研究会

趣旨：アジア域は21世紀に向かって大きく発展する地域として期待されているが同時に大気汚染も進行する可能性を持っている。特に、同地域の雲やエアロゾルがこのような大気汚染の影響を受けてどのように変化するかはエネルギー収支や水収支の長年変化を誘起する可能性を秘めている。この地域の雲とエアロゾルの相互作用を理解するために現在、APEX 'Asian Particle Environmental Change Studies' が実施されている。APEX 研究および下記のテーマに興味のある研究者の参加を得てこの問題に関する研究会を行いたい。

- (1) アジア域の大気汚染に関する研究
- (2) 同地域の雲とエアロゾルの相互作用に関連するモデリング、観測
- (3) APEX-E1観測実験の解析

コンピーナー：中島映至(東京大学気候システム研究センター)、岡本 創(通信総合研究所鹿島宇宙通信センター)

④テーマ：中間圏の物理化学過程

趣旨：この分科会では高度50~90 km に位置する中間圏における力学、光化学過程の特性、ならびにそれらの長周期変動を取り扱う。

中間圏では、背景風と各種の大気波動の振幅が同程

度となり、波動と平均風、および波動・波動間の相互作用が顕著となる。また、中間圏の組成分布は光化学および力学過程の双方の影響で定まっている。中間圏では地表付近の現象の影響が及んでいるとともに、太陽・惑星間空間からの影響も現れている興味深い境界高度領域である。例えば、中間圏界面温度の長周期変動には、太陽活動と火山噴火の影響が同時に現れている。さらに、中間圏の上下で乱流拡散が分子拡散に変化することで代表されるように、様々な過程が変化する遷移領域ともなっている。

この分科会では招待講演を中心に中間圏の特性、およびその上下の大気層との関係を観測および数値モデルの結果をもとに議論する。

コンピーナー：津田敏隆（京都大学宙空電波科学研究センター）、宮原三郎（九州大学大学院理学研究院）

⑤テーマ：豪雨・豪雪をもたらすシステム-メソ対流系

趣旨：豪雨や豪雪をもたらすものとして、複数の活発な対流セルと層状に広がる雲システムの複合体であるメソ対流系は重要である。メソ気象に関する分科会で1997年春の「激しいメソ対流システムの構造と進化」（コンピーナー：小倉義光、武田喬男、吉崎正憲、中村健治、新野 宏）や1999年春の「集中豪雨をもたらす環境とその発生・維持システム」（コンピーナー：加藤輝之）では、メソ対流系は中心的なテーマであった。近年ドップラーレーダー・境界層レーダー・航空機などを用いた大規模な野外観測がいくつか行われて、また領域モデルおよびそれにネストされた非静力学雲モデルが飛躍的に発展して、メソ対流系の実態やそのメカニズムは理解されるようになった。非静力学モデルでは（いつもではないが）観測される時間降水量の極

値まで再現できるようになった。これにより非静力学モデルによる数値予報が既に視野に入りつつある。しかし、異なる水平スケールの気象擾乱との関係やより細かい構造（雲物理、雷、ダウンバースト、竜巻など）などまだわからないことも多い。ここで、最近のメソ対流系に関する様々な切り口の研究を集約して、その到達点や問題点を整理してみたい。いろいろな立場からの参加を期待する。

コンピーナー：吉崎正憲（気象研究所予報研究部）

⑥テーマ：アジアモンスーン域での集中観測研究（GAME）で何が得られたか？

趣旨：大陸スケールの水とエネルギー循環の観測研究を主な目的として、国際共同研究「アジアモンスーン地域におけるエネルギー・水循環観測（GEWEX-Asian Monsoon Experiment；GAME）」が計画され、実施されている。中でも、熱帯域、中国梅雨前線帯、チベット高原、シベリア寒冷圏の4地域では集中観測が行なわれ、これまでになく貴重なデータが得られている。本セッションではそうした観測データや数値モデル、衛星観測推定値等を用いてどの様な新たな知見が得られたか、あるいはどの様に実態解明が進んだかに関する研究報告を取りまとめる。そして、GAMEを通じてアジアモンスーンに関する理解が結局どの程度どの様に深まったのか、何が不明なまま残されているのか、そして今後どのような研究テーマが興味深いと期待されるかといった点について包括的な議論を行ない、21世紀の幕開けとする。

コンピーナー：沖 大幹（東京大学生産技術研究所）、木村富士男（筑波大学地球科学系）

講演予稿集原稿の書き方

大会発表を申し込む会員は、以下の要領で予稿集原稿を作成し、本号末の申込用紙とともに講演企画委員会へ送付して下さい。

1. 原稿枚数：1件1枚
2. 用紙：A4判の白紙を使用する。その他の規格の用紙を使用しないこと。
3. 記入方法：A4用紙に直接出力するか、別紙に作成した文書・図表を用紙に糊付けする。原稿はダイレクト製版される。
4. 図および表：写真や図表には折目が入らないようにする。階調のある写真や図は、階調度が落ち

る場合がある。

5. インク：ワードプロセッサ、手書きの場合とも、墨または濃い黒色インクを使う。黒以外の色のインクや鉛筆を使用しないこと。
6. 配置（付図参照）：記載範囲は縦250 mm×横175 mm以内とし、上部には20 mmの余白をとる。最上段に標題、その下に著者と所属を書き、本文をその下につける。著者が複数の場合には講演者の左肩に*をつける。標題から本文までの間隔は20~25 mmとする。本文はなるべく2段組（左半分→右半分）にする。

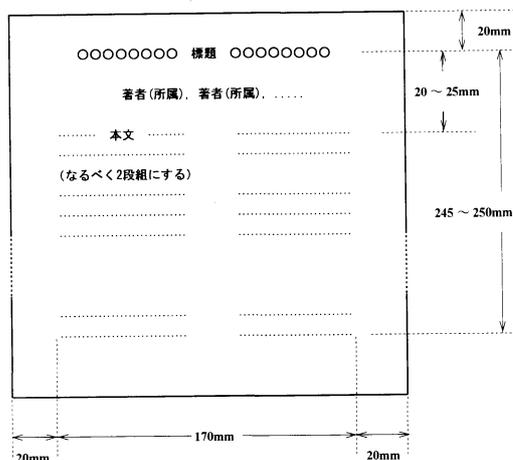


図 A4判用紙による予稿原稿の作成要領

7. 著作権：予稿集に掲載された文章および図表の著作権は日本気象学会に帰属する。
8. 送付：予稿集原稿を細かくおりたたまないこと（2つ折りは可）。送付先・送付期限は「講演申込要領」（865～866ページ）参照。

非会員の大会講演について

気象学会会員でない方は原則として大会講演を行うことは出来ません。しかしながら、短期滞在の外国人や他分野の研究者が気象学会において講演を行う場合を考慮して、講演企画委員会では以下の規定を満たすものに限って非会員が大会講演を行うことを認めています。

1. 共著者の中に会員が含まれていれば、非会員の講演を認める。

2. 上記規定を明確にするために、講演申込用紙に講演者の会員番号（非会員は会員である共著者の会員番号）の記入を義務づける。
3. ただし専門分科会に関しては、各コンビーナーの判断にゆだねる。

なお、講演企画委員会としてはこれまでと同様、継続的に大会発表を行いたい人には会員になって頂くよう望みます。

研究会活動への支援について

講演企画委員会では、大会期間中またはその直前・直後に会員が自主的に運営する研究会活動に対し、一般の会員が自由に参加できることを条件として、可能な支援をします。具体的には、大会プログラムへの掲載、会場・機器の手配、時間の調整などが考えられます。支援を希望する方は、右記の事項を明記の上、講演企画委員会へ申し込んで下さい。

申込先・申込期限：大会講演と同じ

記入事項：1. 会の名称とテーマ

2. 代表者の連絡先
3. 希望日時・開催場所
4. 予想参加人数
5. 希望する支援内容

なお、大会会場の使用を希望する場合は、準備の都合上、上記申込期限を厳守して下さい。期限を過ぎての申込は一切受け付けません。